

# 日本で ビーチスポーツの 国際大会を！

マリンスポーツやビーチスポーツの総合大会「ワールドビーチゲームズ」。オリンピック、アジア競技大会の次に値する国際大会の日本開催を目指し、2014年春「ビーチゲームズ日本招致推進プロジェクト」が立ち上がった。旗振り役となるのは、海辺の通年利用を掲げてきたNPO法人日本ビーチ文化振興協会・理事長の朝日健太郎さん、そしてナビゲーターを務める浅尾美和さんだ。プロジェクトの活動と真の狙い、2人が目指す日本の海辺について語ってもらった。

撮影／松永和章(AgenceSHOT)  
取材・文／吉田亜衣(ビーチパレースタイル)  
取材協力／MADE IN ISLAND  
<https://www.facebook.com/made.in.island>

——プロジェクトを立ち上げた経緯からお聞かせいただけますか？

**朝日** 日本のビーチといえば海水浴というイメージが強いですが、私たち日本ビーチ文化振興協会では、2003年から海辺の通年利用を目的に活動してきました。最初に取り組んだのが、ビーチスポーツやビーチレクリエーションを中心したビーチライフを推進するイベントの開催でした。この11年間、全国各地の自治体さんと協力して活動してきたことでビーチライフが少しずつ定着してき

たと感じています。しかし世界では、日本よりも海辺の活用法がずっと進んでいます。2008年からはビーチスポーツ、マリンスポーツの総合大会『アジアビーチゲームズ』が2年に一度開催されていますし、2015年には『第1回ワールドビーチゲームズ』が開催されることも決定しました。日本で世界規模の大会を開催することが、海辺での過ごし方や楽しさを知ってもらう最高のアピールになると思います。それが今回のプロジェクトを立ち上げたきっかけです。

——浅尾さんも現役時代、数多くの国を転戦されていましたが、海辺の利用について感じることはありましたか？

**浅尾** 海辺で過ごす文化が定着している国は、ビーチを使うのがすごく上手ですね。海だけじゃなくて川沿いに砂を引いて読書できるスペースがあったり。それに日本ではまだ知られていないビーチスポーツやマリンスポーツが、海外では盛んに行われています。

——5月に開催された『ODAIBA

ビーチスポーツフェスティバル』で、お2人はいろいろなスポーツを経験されたとか。

**浅尾** はい！ ビーチテニスでは朝日さんと対決して勝ちました(笑)。自分が現役だった頃ビーチバレーボールはまだ知られていないスポーツだな、と思っていたんですね。でも今回のフェスティバルを体験してみて、まだ発掘されていないけど面白いスポーツがたくさんあることに気づきました。

**朝日** 水上バイクの噴射の力を利

用して空中での芸術点で争うフライボードも面白かったですね。マリンスポーツは、まさにショータイム。やる人も楽しいだろうけど、見ているほうも楽しかったです。

**浅尾** ビーチフラッグスも子供たちと一緒にやりました。最初はなかなか裸足になれなかった子供たちが、1回裸足になるとフラッグだけじゃなくてビーチハンドボールを体験していたり、全部の競技を楽しんでいましたよね(笑)。

**朝日** 慣れている子は靴と靴下を

パッと脱いで砂浜を駆けていくけど、慣れていない子は「ママ、靴下脱いでいい？」というところから始まる。足が汚れちゃうとか、そういうことは実はたいしたことはなくて、まずははだして砂場に降りてごらん、と。そういうスイッチが自然に入る環境を作っていくことが海辺の文化を作っていくきっかけにしたいですね。

日本の海辺を元気にしたい。  
楽しみ方を知ってほしい

——海辺の文化を定着させていくための課題はどんなところでしょうか？

**浅尾** 子供たちが安心して遊べる雰囲気づくりが大切だと思います。ブラジルの海辺はビーチバレーボールのコートがたくさんあって、砂もきれい。いつでも子供たちが砂遊びをして、ビーチサンダルが当たり前。砂の上で遊ぶのが、生活の一部になっているんです。でも日本では、ビーチバレーボール教室をやる時も、まず靴を脱ぐことから教えるので「はだして遊ぶ」という意識がまだないのかなと感じます。

**朝日** そうですね。一つ感じるのは、日本の海岸の造りが遊歩道やボードウォークが境界線みたいになっていて、砂浜に自然に降りられる仕組みができていないということ。無意識のうちに砂の前で止まってしまう。それをどういうふうに解決するかといったら、砂へつながら階段や道、靴置場を設置して誘導できる仕組みがあればいいですよ。そしてはだしになって遊んだ後、足をきれいに洗える足洗い場があるとはだしになりやすい。

**浅尾** 女性にとっては、更衣室があるとうれしいですね。

## 浅尾美和

## 朝日健太郎

——日本人の習慣にあった工夫は必要ですね。

**朝日** 砂浜と聞いたときに「楽しむ場所なんだ!」と認識できるような世界を作っていきたいですね。

「ODAIBAビーチスポーツフェスティバル」ではスタンド席で観戦できるようにワンドリンク付きでチケットを販売していたのですが、お客様に「チケットいかがですか?」と問うと「何のチケットですか?」と目がキョトンとなる。野球場なら野球のチケット、コンサート会場ならコンサートのチケットって自然に結びつくけど、ビーチでは何のチケットかピンとこない。お酒でも飲みながら日本の海辺でビーチスポーツやマリンスポーツをのんびり観戦する、という文化を浸透させていくことが重要ですね。

——プロジェクトの今後の活動と最後に抱負をお願いします。

**朝日** 第一の目的は、ビーチゲームズ日本招致推進プロジェクトをき



かけに日本の海辺を元気にしていこう、海辺の楽しみ方を知ってもらうこと。第二の目的は、どうやったら競技人口が増えるのか、どうやったら世界で勝てるようになるのか、と同じ悩みを抱えている競技団体の横のつながりを強固にして、各競技を発展させていくのが狙いです。どの競技団体さんもビーチスポーツ、マリンスポーツを盛り上げようと熱意が感じられる。その強いネットワークを通じてビーチゲームズという世界規模の大会の存在、その意義を周知していきます。ナビゲーターの浅尾さんとともに。みんなが喜んでくれるからね、妖精がいると(笑)

**浅尾** 今回、朝日さんに声をかけていただいて、久しぶりにビーチに戻ってこれることができて本当にうれしかったです。私は応援サポーターというカタチで参加しているんですけど、私たちが砂浜で何かやっているとみんなが注目してくれる。「面白そうだな」と思ってもらえれば、あとは私がいなくても大丈夫(笑)。ビーチスポーツやマリンスポーツの魅力がたくさんの人に知ってもらえる機会が作れるお手伝いできたと思います。

**朝日** 今回のプロジェクトは、各競技の普及はもちろんですが、その中

にある五輪競技にとっては2020年の東京五輪に向けての強化のカギも握っています。そして海辺の活用はスポーツ愛好者だけではなく、スポーツをやらない人にも生活の中で貢献できる。そういう意味でも、ビーチゲームズの招致は、すごく多面的で一石何鳥にもなるんです。「海にいることが楽しい」「見て楽しい」「やって楽しい」ということをまず知ってもらえるように活動していきます。



ビーチスポーツやマリンスポーツの魅力は、たくさんの人に知ってもらいたい

**浅尾美和** あさおみわ

MIWA ASAO  
1986年2月2日生まれ。三重県出身。高校卒業後、ビーチバレーボールへ転向。「ビーチの妖精」として注目され一躍人気選手へ。テレビやCMに多数出演し、ビーチバレーボールという競技を日本で広めた。2012年をもって現役を引退。昨年結婚し、現在はタレント活動、バレーボール教室を行っている。



ビーチゲームズの招致は、普及と強化を含め多面的で一石何鳥にもなる

**朝日健太郎** あさひけんたろう

KENTARO ASAHI  
1975年9月19日生まれ。熊本県出身。元バレーボール全日本代表選手。2002年からビーチバレーボールへ転向。2008年北京五輪、2012年ロンドン五輪に出場した。2013年からNPO法人日本ビーチ文化振興協会理事長に就任し、海辺の文化定着を目指し活動している。

## ～ビーチゲームズ日本招致推進プロジェクト～ 『ODAIBAビーチスポーツフェスティバル2014』開催! ナビゲーターは、ビーチの若大将 朝日健太郎&ビーチの妖精 浅尾美和



ビーチライフネットワークの競技団体

NPO法人日本ビーチ文化振興協会は通年、人々が集い、ふれあい、賑わいのある「海辺の広場」の創造を目指し、全国の海辺でビーチライフ\*の普及活動を行って参ります。徐々に海辺を持つ自治体から海辺環境のあり方や、観光誘致資

源としての活用手段など、ご興味を持たれ問い合わせが多くなって参りました。そんな中、2014年3月、「ビーチスポーツの世界総合大会を開催することを決定する」という情報を受け(各国オリンピック委員会連合(ANOC)の理事会にて発

表)、日本にもぜひビーチ・マリンスポーツの世界大会を誘致しようと「ビーチゲームズ日本招致推進プロジェクト」を発足致しました。この活動は、島国日本の海沿いの価値観向上と環境の変化、それに伴うビーチ・マリンスポーツの活性化



ビーチバレーボール



ビーチテニス



フライボード



ビーチサッカー

を目指し、各地域からのオリンピックの創出までを目的としています。日本の海辺に「ビーチ文化」形成を促す活動第一弾として、弊協会理事長 朝日健太郎と元ビーチバレーボール選手浅尾美和さんをナビゲーターに全国に普及して参ります。その活動第一弾として、ビーチスポーツの祭典「ODAIBAビーチスポーツフェスティバル2014」をお台場海浜公園おだいばビーチ(東京都港区)で開催しました。ビーチバレーボール、ビーチテニスのトッププロ選手による公式試合や、ハンドボールの第一人者 宮崎大輔選手たちによるビーチハンドボールエキシビジョン、ビーチサッカー日本代表 茂怜羅オズ選手のエキシビジョンなどを多くの方に観戦、体験して頂きました。そして今最も注目度の高いニュースポーツであるマリンスポーツのフライボード体験やスタンドアップパドルレース観戦、体験、ウエイクボードでは、中学生プロ選手のエキシビジョンと、これからの海辺文化の可能性を大いに

理解いただけるよう、披露致しました。またビーチライフエリアでは日本大学理工学部海洋建築工学科の研究生が制作した竹を使用したモダンなパーゴラ(日除け)の下、のんびり読書をしてくつろげたり、砂遊びができるスペースも幅広く展開。初夏のゴールデンウィークに訪れた多くの家族連れに、ビーチスポーツ、マリンスポーツ、のんびりビーチライフを堪能頂きました。どのような活用が地域のオリジナリティ溢れる活性化に繋がるか、ぜひ参考にして頂きたいと思います。



ビーチ相撲体験



ビーチハンドボールエキシビジョン

※ビーチライフとは。

春夏秋冬、スポーツや散歩、健康づくりに海水浴、そして読書をしたり昼寝をしたり…。そんな日常的なビーチでの過ごし方を、私たちは「ビーチライフ」と呼んでいます。

【開催日】2014年5月3日(土)～5日(祝月)

【会場】お台場海浜公園おだいばビーチ(東京都港区)

【天候】  
3日(天気 晴れ、最高気温26℃、最低気温16℃)

4日(天気 晴れ、最高気温23℃、最低気温15℃)  
5日(天気 雨のち曇り、最高気温21℃、最低気温17℃)

【来場者数】15,000人

【主催】NPO法人日本ビーチ文化振興協会

【主管】ODAIBAビーチスポーツフェスティバル2014実行委員会

【共催】一般財団法人みなと総合研究財団

【後援】産経新聞社、国土交通省、東京都、東京臨海副都心グループ、臨海副都心まちづくり協議会

【特別協力】環境省

【協賛】株式会社オーエフ、京浜急行電鉄株式会社、全日本空輸株式会社、東京スポーツ・レクリエーション専門学校、東京ワンダフルプロジェクト、ペボニア・ボタニカ(株式会社ウィズ・アス)、株式会社ユーケン、モルソン・クアーズ・ジャパン株式会社、有限会社メネフネウォータージャパン

【協力】日本ビーチバレーボール連盟、一般社団法人日本ビーチテニス連盟、日本ビーチ相撲連盟、特定非営利活動法人日本ライフセービング協会、公益財団法人日本ハンドボール協会普及部ビーチ専門委員会、一般社団法人日本ウエイクボード協会、一般社団法人全日本フライボード協会、日本大学理工学部海洋建築工学科、アラソアン、一般社団法人川崎ビーチスポーツクラブ、Graces、浅草「追分」、お台場住民有志の皆様

大災害時対応も含めた海辺の安全教育

当協会では、楽しく海、海辺を活用するにはまず未然に事故を防ぐ事を第一に啓発しております。小さいお子様から保護者、高齢者におけるオールターゲットで講習会を開催したり、訓練をしたり、海の正しい知識を理解していただけるよう、ライフセーバーを中心に安全教室を実施しています。一方、東日本大震災が発生し、南海トラフ巨大地震、首都直下地震の切迫性が指摘される中、日常の安全確保はもちろんのこと、万が一の事態が起きても安全に避難できる仕組みづくりが、今まさに全国の海岸に求められています。このような背景の下、当協会では港湾海岸防災協議会様からの委託を

受けて、海辺における日常の安全確保から大規模災害発生時の避難まで、どのように安全意識を普及させるべきかを研究してまいりました。子どもへの安全教育を例にとりますと、「①自分たちの住む『みなとまち』の良いところ」「②海の楽しさ面白さ大切さ」「③海辺での身の守り方」「④もし地震が起きたら」「⑤おとうさん、おかあさんと話をしよう」といった項目をプログラムの基本構成とし、愛郷心、日常の身の守り方、大災害への備えを一体のものとして教育することが重要であり、次世代の地域の担い手にもつながるとの結論に至りました。今後とも引き続き、安全教育も含めたビーチ振興を図ってまいりますので、よろしくご協力のほどお願い申し上げます。



紙芝居による海辺安全教室



ライフジャケットを着用して恐怖心を失くす